

待兼山俳句会

吟行 第六百八十回 世話人 山田安廣・鈴木輝子・寺岡 翠・根来真知子

東中 乱・向井邦夫・森 茉衣

日時 令和五年十月二十九日(日) 会場 神戸市東灘区魚崎西町会館会議室 締切 午後二時三十分

出席者 瀬戸幹三・山戸暁子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・寺岡 翠・東中 乱・向井邦夫・上田恵子・森茉衣

(計九名)

吟行地 倚松庵(『細雪』の家) 櫻正宗記念館 浜福鶴吟醸工房 菊正宗酒造記念館

好天に恵まれて、六甲山を望み神戸港に至る住吉川下流域の散策は快適であった。主眼は谷崎潤一郎が『細雪』を執筆した家「倚松庵」であったが、灘五郷のうちの魚崎郷の浜福鶴銘醸と櫻正宗記念館や御影郷の菊正宗酒造記念館などが点在し、利き酒を楽しむこともできた。谷崎の描いた住吉川氾濫跡は言うまでもなく、阪神大震災の痕跡も留めぬばかりに整備された歩き易い街並みであり街路であった。

次回 例会 令和五年十一月二十日(第三月曜日) 会場 大阪倶楽部会議室 締切 午後二時

兼題 神渡・木の葉(幹三) 小春・報恩講(暁子) その他当季雑詠

選者吟

川に沿ふ黄落の道海に出る 暁子

和室とは木と紙の部屋秋の声

小鳥来て地上に言葉増えに

陰翳を讃へし人や秋深む 幹三

後ろ手に作家歩きし庭の秋

杉玉の金風にゆれ地酒蔵

幹三 選

◎和室とは木と紙の部屋秋の声

宮水の井戸に差し掛く薄紅葉

地下足袋を脱ぎて弁当松手入

裸電球暗き廊下の秋昼に

◎道問ふと同じ行先秋日和

二階より文豪の見し秋の川

電車にて二時間の旅秋惜しむ

◎仕込桶に深き傷あり身にぞ入む

黒塀を曲ればそこに新酒待ち

子が追ひて父が網置く秋の川

細雪の世界にしばし秋深む

磨り減りし六尺櫓や新走り

薄紅葉灘の酒屋に続く道

文豪愛でし小振りな桜紅葉して

川に沿ふ黄落の道海へ出る

◎秋澄むや段の軋みは姉妹らか

船徳利そこは平らにひややかに

◎小鳥来て地上に言葉増えにけり

文豪の窓ひらかれてまゆみの実

暁子

兵十郎

恵子

乱

茉衣

邦夫

暁子

兵十郎

乱

兵十郎

翠

兵十郎

輝子

乱

暁子

乱

輝子

暁子

輝子

倚松庵また立ち返る秋思かな

乱

幹三 特選句講評

・和室とは木と紙の部屋秋の声

暁子

「秋の声」とは秋の気配を心のどこかで感じるという魅力的な季語。外界との境目が儚げな和室にあればこそ、その「声」が聞こえてくる。

・道問ふと同じ行先秋日和

茉衣

知らぬ者どうしが、たまたま小さな関わりという縁を持った瞬間である。まさに秋のいい日。

・仕込桶に深き傷あり身にぞ入む

兵十郎

百年単位で使われてきた樽にはさまざまな物語があつたであろう。その遙かな思いが身に沁みてくる。

・秋澄むや段の軋みは姉妹らか

乱

階段を下りて来る音にふと小説の登場人物の

気配を感じた、というのである。吟行ならではのファンタジックな句、と鑑賞させていただいた。

・小鳥来て地上に言葉増えにけり

暁子

その鳥のことが話題になったのか、秋のいい日和を愛でる言葉であつたのか、小鳥をきっかけに人に会話が生まれたのか……余白の広い大きな句。

暁子 選

水害戦災地震潜り来しや檀の実

翠

秋の川ちよろちよろちと湾岸へ

邦夫

宮水の井戸に差し掛く薄紅葉

兵十郎

八畳のうちの二畳に秋日影

幹三

きらめきて秋潮のぼる住吉川

輝子

◎地下足袋を脱ぎて弁当松手入

恵子

出来秋や蒸し米運ぶクレーンで

輝子

道間ふと同じ行先秋日和

茉衣

蒸米を仕込むクレーン秋の蔵

兵十郎

◎杖つきつ翁手入の菊真白

恵子

◎仕込桶に深き傷あり身にぞ入む

兵十郎

源氏訳しし谷崎庵の実むらさき

乱

黒塀を曲がればそこに新酒待ち

乱

子が追ひて父が網置く秋の川

兵十郎

◎杉玉の金風に揺れ地酒蔵

幹三

摩り減りし六尺櫓や新走り

兵十郎

陰影を讃へし人や秋深む

幹三

クレーン車も出動お屋敷松手入

翠

胴太き船徳利や新走り

兵十郎

暁子 特選句講評

・地下足袋を脱ぎて弁当松手入

恵子

植木職人たちの様子をよく観察された。食事の時は心身共にくつろぎたいものだ。

・杖つきつ翁手入の菊真白

恵子

もう少し若い頃からの趣味であろう。老いても菊作りを続けておられるご老人。その方の白髪と白菊が呼応する。

一句目やこの句は今日の吟行の時に見かけられた情景かもしれないが、特に今日の風景に限られたものではない。吟行の時は、その地、その時ならではの内容の句の方が楽しい。その点で少し残念だが、佳句なので選んだ。

・仕込桶に深き傷あり身にぞ入む 兵十郎

今日の吟行のメインは倚松庵と酒蔵であつた。作者は酒蔵の展示品の仕込桶を見られたのか、或いは今実際に使われているものをご覧になられたか、現場での感慨。

・杉玉の金風に揺れ地酒蔵 幹三

金風は中国の五行（木火土金水）説の金をととり、秋風のことをいう。「秋風に揺れ」では寂しい感じであるが、「金風」をもってこられ、酒蔵の豊かさ、豪華さを表現された。

互選三句

輝子 選

蒸米を仕込むクレーン秋の蔵 兵十郎
仕込桶深き傷あり身にぞ入む 兵十郎
和室とは木と紙の部屋秋の声 暁子
久しぶりに和室を見た気がする。何もかも木と紙だ。

兵十郎 選

秋うらら音盤残る蓄音機 幹三
小鳥来て地上に言葉増えにけり 暁子
文豪の机の広さ秋裕 輝子
広い机に資料を積み上げて書く文豪の情景が浮かぶ。

翠 選

文豪の窓開かれてまゆみの実 輝子
摩り減りし六尺櫓や新走 兵十郎
文豪の机の広さ秋裕 輝子
谷崎の仕事に向かう秋の一日を想像した。

乱 選

川に沿ふ黄落の道海へ出る
文豪の窓ひらかれてまゆみの実
実柘榴や文豪彩る女性たち

暁子
輝子
翠

翠熟した実柘榴に谷崎創造の四人姉妹を見た。艶もあり。

邦夫 選

きらめきて秋潮のぼる住吉川
胴太き舟徳利や新走り
色変えぬ松が迎える倚松庵

輝子
兵十郎
茉衣

倚松庵には年中緑の松数本、松手入すれば魅力倍增。

恵子 選

実柘榴や文豪彩る女性たち
クレーン車も出動お屋敷松手入

翠
翠

杉玉の金風に揺れ地酒蔵

幹三

良いお酒ができています。情景も美しいです。

茉衣 選

無料なる利酒やよき食前酒
実柘榴や文豪彩る女性たち
後ろ手に作家歩みし庭の秋

邦夫
翠
幹三

参加者自選句

居間にある谷崎の写真が庭へ抜け出たかの錯覚覚える。

出来秋や蒸し米運ぶクレーンで
胴太き船徳利や新走り
細雪の世界にしばし秋深む
秋澄むや段の軋みは姉妹らか
秋晴れの魚崎郷を駆け回る
杖つきつ翁手入れの菊真白
行秋や再びひとく『細雪』

輝子
兵十郎
翠
乱
邦夫
恵子
茉衣

